

# 日韓女流文学における固有文字の発明

## — 仮名文字とハングル —

### Invention of Unique Letters in Japanese and Korean Female Literature

#### — Focusing on Kana and Hangul Letters —

金 鍾 徳\*

Jong-duck Kim

## 1. 記録好きな民族

日韓両国民は世界でも有数の記録好きな民族で、現在東アジアの漢字文化圏の中で両国だけが固有文字を使用している。韓国の新羅時代には漢字を借用した吏読式表記法で郷歌を書いている。朝鮮王朝の世宗王28年(1446)に新しくハングルが創制され、詩歌や随筆、小説などが創作されるようになった。日本でも古代歌謡を万葉仮名で表記したり、また万葉仮名をもとに創案された仮名文字はハングルより約5世紀も早いので和歌や物語、日記、随筆、説話など膨大な作品群が現存している。

この報告では日韓両国の固有文字の発明によって誕生した宮廷女流文学を比較しながら、固有文字と女流文学の成立に新しい光をあてて見たいと思う。特に平安時代の女流文学と朝鮮王朝の『癸丑日記』、『仁顯王后伝』、『閑中録』などと対比する。そこで両国の宮廷女流作家が如何なる教養と批判意識をもって何を書き残そうとしたのかについて考えてみたい。

## 2. 仮名文字とハングル

周知のごとく日韓両国はインド、中国に発する仏教や儒教、漢字などさまざまな文化を共有している。漢字文化圏の諸国は固有文字がなかった時代に漢字を借用して固有語を表そうとした。新羅の郷歌式表記法(郷札、吏読、方言)、日本の万葉仮名、ベトナムの喃字(チュノム)などはすべて漢字を借用した固有語の表記法である。これらの表記法を日本は平安時代まで、韓国は朝鮮時代まで、ベトナムは二十世紀にローマ字表記が定着するまで漢文とともに固有語を表記する方法として使用されてきた。ところで、漢字文化圏の国々が伝承歌謡などの細やかな感情を表現するために漢字を借用した表記法を工夫したものの、漢字で固有語を自由に表現することはたいへん不便であった。

そこで日本では平安初期に万葉仮名をもとにして新しく仮名文字が発明され、韓国では新羅の滅亡とともに郷歌式表記法が廃れた後、朝鮮王朝四代の世宗王(1418~50)の時代になってハングル文字(1443年)が創制される。世宗大王を含めて集賢殿の学者たちに

---

\* 韓国外国語大学校日本語大学 (Japanese Language and Culture, College of Japanese Hankuk University of Foreign Studies)

よって創案されたハングルは、漢字とは全く異なる新しい表記法であった。ハングルは『訓民正音』（1446年）として刊行されているが、その冒頭には「わが国の語音は中国と異なり、漢字と相通じず。故に愚民は言いたいことがあっても、それを書き表せない者が多い」とあって、新しく二十八文字を創制する必要性が述べられている。

日韓両国で新しく発明した仮名文字とハングルの使用に関しては類似する認識が多い。日本では漢字を真名・男文字と言ったのに対して、仮名文字は女文字、女手、女仮名、子供文字などと言われた。韓国でも漢字漢文に対して、ハングルは諺文、女文字、子供文字などと言って蔑まれてきた歴史がある。しかし、両国とも自国の音声をありのまま表現できる固有文字が発明されなかったら、繊細な自然や人間関係の微妙な心理描写などは不可能であったと思われる。

### 3. 平安時代の教養と宮廷文学

平安時代と朝鮮王朝はそれぞれの社会制度や文化が異なるだけに、宮廷文学の作者となった女房と宮女も似ていて違う点が多い。平安時代の律令で後宮の女官は出身や身分によって上臈、中臈、下臈の品格に分類される。また日本は中国や韓国にある宦官制度を受け入れず、宮中におけるすべての雑務は内侍司（女房）が取り仕切っていたようである。平安時代の女房といえば宮中で働いている女官のことであるが、上流貴族の家に仕えた女性も女房と総称された。宮廷女流作家となった清少納言や和泉式部、紫式部なども女房の一人であった。

平安時代に宮廷女流作家となった女房は受領層の中流貴族出身が多く、宮中に部屋を与えられ、雑務とともに仕えている主人の家庭

教師や秘書の役割をしていた。清少納言や和泉式部、紫式部、赤染衛門などは夫と離婚や死別した後、「家の女」として平凡な暮らしをするより華やかな「宮仕えの女房」を志向した女性であった。彼女たちは宮仕えをしながら主家の男性と交際をしたり、結婚して退職することもできた。そこで平安時代の女房は朝鮮王朝の宮女に比べて、恋愛や結婚、退職などの自由があったようだ。宮廷作家となった女房は後宮サロンを指導する学問・芸能などの教養を備えた女性で、和歌や和文ばかりでなく漢詩漢文や音楽、習字にも優れた素養のある才女であった。これらの教養は女性の学問だけでなく男性貴族の教養でもあって、男女の恋愛や色好みの条件ともいえよう。

すなわち、平安時代に宮廷作家となった女房は和歌を詠んだり日記や随筆、物語などを書いたり、中宮や女御に和漢の学問を教えたりした。清少納言は『枕草子』で、宮中の有職故実、人事、自然と四季の情趣などに対して鋭い観察力をもって「をかし」の美意識を書いている。また紫式部は日記の中で主家の動静を書いたり同僚の女房を批判したり、実人生では遂げられなかった理想的な恋愛を『源氏物語』の中で描こうとした。つまり和漢の学問や宮仕えの体験は女流作家となる必須条件であったといえよう。

### 4. 朝鮮王朝の宮女と女流文学

朝鮮王朝の宮女（内人、宮人）とは王と王妃に仕えた内命婦の総称で、尚宮、内人、ムスリ、房子、医女などの職掌についた。宮女は公務で官僚との取次ぎの場合を除いては、王と宦官以外の男性と接触することがたたく禁じられていた。また本人の重病や仕えている人が亡くならない限り宮中から出ることさえ許されなかった。宮女はおもに中人（両班

と常民の中間層)階級の出身であったが、七歳ごろ宮中に入って宮中法度、ハングル、『千字文』、『大学』、『小学』などを習い、宮中儀礼を覚えた。そして正五品の尚宮になるまでに35年もかかり、そのトップは提調尚宮と言われた。ところが、宮女が運良く王の恩恵をこうむると直ちに従四品の淑媛となり、雑務から解放され専ら王に奉仕する後宮となる。

朝鮮王朝の普通の女性教育は儒教倫理とハングルであったが、宮女は宮中に入ってから宮中諸法度や漢文を習ったようである。朝鮮王朝の17世紀初から18世紀末にかけて成立した『癸丑日記』、『仁顯王后伝』の作者は「ある宮女」で、『閑中録』の作者は東宮妃の恵慶宮洪氏である。宮女と東宮妃の身分は雲泥の差があるが、三作品とも端雅な宮中体ハングルで書かれた宮廷女流文学である。朝鮮時代の妃嬪や貴族の女性は自分の書いた文章が閨房の外に出ることを極度にタブー視したようである。これらの女流作家は宮中で想像を絶する歴史的な事件を目撃し、一門が筆禍事

件にさらされることを覚悟して筆を執ったのではないかと思われる。

## 5. おわりに

日韓両国の女流文学はそれぞれ固有文字で書かれているという点では全く同じで、宮廷の女流作家たちは実人生の特異な体験や美意識を書き残している。両国とも作家となったのは中流貴族出身の女房や宮女で、彼女たちは宮中で起きた出来事、人生の苦悩、宮仕え観、同僚に対する批判、上流貴族との関わりなどを仮名文字とハングルで書いている。平安時代の女房は個人的な体験を自由に書くことができたが、朝鮮王朝の宮廷作家は儒教倫理や宮中の法度などに縛られ、王位継承にまつわる歴史的な事件や主家の盛衰を匿名で書いている。そこで平安時代の女房は仮名文字で日記や随筆、和歌、物語などを作り出し、朝鮮王朝の宮女はハングルで詩歌や随筆、小説などを創作している。